
魔法少女リリカルなのは～融合せし平行世界の未来～

ラハール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜融合せし平行世界の未来〜

【Nコード】

N7215X

【作者名】

ラハール

【あらすじ】

ほぼ無限にある平行世界・・・4つの世界が融合したときなにが起きる

この小説はデステイニープラン様のヴァルクと時の秒針様のハクとうちの佐助が主人公のコラボ小説です

平行世界の核の崩壊（前書き）

ラハール「さて始めました」

佐助「無謀なことをな」

ヴァルク「良いじゃないですか」

ラハール「だよね」

佐助「ウザいぞ」

ハク「俺は結構嬉しいぞ佐助とヴァルクと一緒に戦えるし」

ヴァルク「そうですね」

佐助「だな」

ラハール「始まります」

平行世界の核の崩壊

ここは魔法少女リリカルなのはの平行世界を均等に保つ核があるリリなのの平行世界の中心、これによって数あるリリなのの並行世界は

均等を平和を保っているそして今この中心を守っている番人の名は猿飛佐助、彼もあるリリなのの世界の住人の1人である彼が番人に選ばれたのは理由は2つ

1つは彼の力憑神は神にも匹敵する力があるから2つ目はここを元々守っていた王である蒼炎王・アグニウムと白炎王・ウルカヌスの力の象徴蒼炎と白炎が使えるのが大きい

佐助「今日も以上はなさそうだな」

カイト『そうだね』

佐助のデバイスであるカイトが応える

佐助「問題ないなら帰ってThe Worldでもやりますか」

ビービービー、佐助がそう言ったとたん警報が鳴る

佐助「カイトセットアップだ」

カイト『了解』

佐助はセットアップする、その姿はhack//のカイトXthの姿を想像してくれると分かりやすい

佐助「さて侵入者退治と行きますか！！」

終焉の死を与える影を担ぎ急ぐ、終焉の死を与える影は万死ヲ刻ム影をもつと禍々しく深紅にした感じ

佐助が着いた頃には警備ロボットがあつたはずなのにそれが塵も残さずになくなっていたそして真ん中に右翼を悪魔の羽左翼を六枚に分けられた天使の羽にした白髪をロングにした男がいた

???「この程度か・・・」

佐助「テメエなにもんだ？」

警戒し殺気を出しながら言う

???「そちらから名乗るのが礼儀ではないかな」

佐助「そうだな、俺は猿飛佐助だ」

???「マールテトラ、天魔王神・マールテトラだ」

その名を言った瞬間膨大な殺気が出てきたそれを受けた佐助はゾクツとした

佐助「そうか・・・始めようかマールテトラ！！」

マール「ふむ、来るがいい」

佐助は終焉の死を与える影で斬るそれをマールは右手の剣で受け止め左手で掌底を放つがそれを佐助は自分から後ろに飛んでダメージを無くす

マール「なるほど・・・本気を全力を出しても良いようだな」

空間がマールの開放された魔力により振動する

佐助「出し惜しみは出来そうにないようだな」

カイト『そうだね、八相全ての力も使わなきゃ厳しいよ』

佐助も自分のリミッターを外し八相からも力を借りるそして武器を薄明の双剣に変えるそして佐助の身を蒼白の炎が包む
これは蒼炎と白炎を同時に使った状態

マール「行くぞ、貴様が感じるわ天魔王神の絶対なる恐怖だ」

佐助「なら来い、テメエに刻んでやるよ終焉の死をなあ！！」

2人は超々高速の斬り合いをしだす、マールが斬ってくるなら高速で後ろを取り斬るそれをマールがかわし今度はマールが佐助の後ろを取って斬る当たりそうな攻撃は受け流したり受け止めたりそれを仮面ライダーカ。トのクロッ。アップより速く動き繰り返し返している

マール「インフィニティフリーズ（無限の氷結）」

佐助を足元から凍らせようとするが

佐助「そんなもん効くかよ!!」

蒼白の炎によって一瞬で溶かされる

マーラ「天魔雷界」

マーラの上空に魔方阵が展開されるそして白い雷が佐助を狙って何回も落ちる

佐助「チッ」

それを回避した場所にマーラテトラは居た

マーラ「くらえ猿飛佐助」

その一撃は空間を粉碎させる一撃だった、それを佐助は魔力を薄明の双剣に一転集中させてギリギリガードとするが奥の方までフツ飛ばさせる

流石にとっさの判断でのガードだったので佐助はボロボロのハズだが

佐助「結構効いたぜマーラテトラ」

所々キズはあるがボロボロではなかった

マーラ「どうゆうことだ？」

佐助「なにメイガスの力で最大限まで細胞を増殖しただけだよ」

マーラ「ほお」

佐助「今度はこっちの番だ！！蒼白の焰球！！」

蒼白の焰球は高速でマールはかわし佐助に高速で近づき斬るがそれは霧のように消える

佐助「それは幻覚だよ・・・くらえ！！十二爪炎残痕！！」

蒼白の炎を纏った薄明の双剣で三爪炎痕を高速で四回おこなうようなもの

マール「クッ！」

マールテトラは受けるだが致命傷は全てうまく避けていた

佐助「・・・」

油断なく構える佐助

マール「ククク・・・クハハハハ！！久しぶりだこんな強敵に出会えたのわだがこれで終わらせてもらっ」

マールテトラの周りが歪む

佐助「俺も決めさせてもらっぞ」

佐助は蒼白の炎を纏め巨大な炎の玉にする

マール「全てを混沌に包み込めカオスインフェルノ！」

マールテトラを中心に空間が歪み全てを空間ごと押し潰していく

佐助「蒼白の炎よ希望をしめし終焉を見せろお！！蒼白炎・フレイムインパクト！！」

佐助は超巨大な蒼白の炎の玉を上から投げつけるそれがカオスインフェルノとぶつかり合う

マール・佐助「はああああああああ！！」

2人の全力の攻撃により超新星爆発が起きるそれによって2人はボロボロの状態である

マール「くっ・・・いいのか？ここに来ているのは私だけではないぞ」

佐助「なっ！本当か？」

マール「ああ、今頃核は壊されてるだろう」

そうマールテトラが言った瞬間眩い光が起きる・・・そして空間が消滅始める

佐助「世界を無茶苦茶にさせるかよ！！スケイス！イニス！メイガス！フィドヘル！ゴレ！マハ！タルヴォス！コルベニク！平行世界の破壊を食い止めてくれ！！」

八相達が別々の場所に向かいすぐに消滅が収める

マール「また合うだろう猿飛佐助」

マールテトラは転送して消える

カイト『大変だよ佐助、四つのリリなのの世界が融合をして1つの世界が生まれちゃったよ』

佐助「どこか分かるか？」

カイト『ヴァルクの居る世界とハクの居る世界と元々佐助の居た世界そして原作にもっとも近い魔法少女リリカルなのはの世界そして世界の根本的元の部分は原作にもっとも近い世界だからなのは達は佐助やヴァルク・ハクのことは知らないだろうね』

佐助「・・・今すぐ向かうぞ、この事をヴァルク達にも伝えなきゃいけないだろうからな」

カイト『了解』

佐助は傷だらけでボロボロの状態ですぐに転送して向かった

三人それぞれ六課へgo！（前書き）

ラハール「ヴァルクとハクと佐助は六課に行きます」

ハク「なのはなら行かないや始まらないだろ」

ラハール「まあね」

ヴァルク「リインフォースさんはいるんですか？」

ラハール「ヴァルクがいてリインフォースがいないなんてありえないからな」

佐助「さて、魔法少女リリカルなのはと融合せし平行世界と始まります」

三人それぞれ六課へgo！

六課

なのは「みんな大丈夫？」

ティアナ「はい、私とスバルは問題ありません」

エリオ「ボクとキャロも大丈夫です」

フェイト「急に大きな地震が起きたね」

なのは達の所にも地震は起きたようだ

はやて「メツチャ大きな次元断層が3つ起きたんやなのはちゃんとフェイトちゃんて1つティアナ達フォワードで1つシグナムとヴィータで最後を向かってほしいんや」

地震があつたがはやては即座に次元断層での調査を指示する

全員「はい！」

く少し時間が進むく

今ヴァルクとリインフォース？は困惑している突然地震と強い光が起きたと思ったら森にいたのである

ヴァルク「どうなってるんでしょうかリインフォースさん・ガトー

少佐」

リン？「すまんがわからん」

ガトー『主よ地形などは今のところ全てミッドのデータと一致したぞ』

リン？はすまなそうに答えガトーは冷静に応えた

ヴァルク「なら六課に行ってみましょう、そうすれば何かわかるかもしれません」

リン？「そうだな」

ヴァルク達は機動六課に向かうことにしたが・・・

???「時空管理局です、すみませんが一緒に来てもらえるでしょうか」

ヴァルク「あれ？ティアナさん達どうしたんですか？」

何気なく応えるヴァルクだが

スバル「ティアこの人知ってるの？」

ティアナ「知らないわよ、着いて来てくれますか？」

ヴァルク「別に良いですよ向かおうと思っていたので、いいですよねリンフォースさん」

リン？「別に構わない」

ヴァルク達はティアナ達フォワードに着いて行った

その頃ハクは

ハク「・・・どこだここは」

山道に居た

ハク「地震が起きて光ったと思えばここにいる・・・転送の一種か？」

転送魔法の一種じゃないかと考えるハクだが

ハク「情報を集めに降りて街に行くか」

まずは情報を集めなければいけないと街に向かおうとする

???「時空管理局です一緒に来てもらいます」

ハク「ん？なのはとフェイトか・・・」

フェイト「ねえ彼私達のこと知ってるみたいだけど」

なのは「よくわからないけど六課に連れて行かなきゃ着いてきてもらえますか？」

ハク「抵抗も何もしないよ」

よく分からないがハクは着いて行った

そして佐助は・・・

佐助「はあはあ・・・痛ッ」

現在木によしかかっていた

カイト『佐助！無理しないでよ！！』

佐助「だが、いち早くヴァルク達に伝えなくちゃいけない」

カイト『だけど！！』

???「おい、時空管理局だ抵抗するんじゃないぞ」

佐助とカイトが言い合っている状況にヴィータが入ってきた

佐助「・・・（良いタイミングだな、六課ならヴァルク達に出会える可能性が高い）」

ヴィータ「てっ、ボロボロじゃねーか！すぐに手当てのできる場所に連れてってやる！シグナムこいつをおぶってくれ」

シグナム「わかった」

佐助はシグナムにおんぶしてもらい六課に向かうことになった

三人それぞれ六課へgo！（後書き）

佐助「なあ作者、敵はいろいろってあるが例えばどんなのだ」

ラハール「FFのバハムートとかガンダムとかのMSとかその他いろいろ」

ヴァルク「まだMSはわかりますけどバハムートってw」

ラハール「あと管理局員はちょっと犠牲になってもらったり」

ハク「おい、犠牲ってなんだよ」

ラハール「まあ、ちょっとね」

佐助「うちの作者が無い文才を絞って書きますが期待しないでください」

ラハール「酷くね!!」

説明＋戦闘（前書き）

ラハール「佐助はちょっとだけ弱体化してるから」

佐助「は？」

ラハール「八相がないからスケイスゼロは10%の力で白炎が使用不可さらに終焉の死を与える影はスケイスゼロの能力の低下のため威力は低下だな」

ハク「キツくないかそれ」

ラハール「大丈夫終焉の死を与える影は低下してても大鎌最強武器だから」

ヴァルク「そうゆう問題じゃないと思うんですが」

ラハール「気にするな」

説明＋戦闘

ヴァルク・ハク・佐助が六課に連れて行かれてからまず最初にハクが六課に着いた

はやて「始めましてやなウチは八神はやてここの部隊長をやます」

ハク「神風白牡丹、ハクで良い、俺達は始めましてじゃないはずだが」

当然の疑問を言うハク

はやて「ちやいまちは始めてじゃないってどうゆうことや」

ハク「同じ部隊だったはずだが」

なのは「どうゆうこと？」

ハク「平行世界にでも飛ばされたか・・・」

平行世界ではないかと疑うハク

はやて「なるほど、ハク君が知っていてウチ達は知らない、納得行くな」

ティアナ「八神部隊長次元漂流者を連れて着ました」

ティアナ達が次元漂流者の2人を連れてきた

はやて「リイン・・・フォース・・・」

なのは・フェイト「う・・・うそ・・・」

リイン？「わーいお姉さまです」

リイン？「どうしましたか主？」

ヴァルク「ハクさんどうゆうことですか？」

ハク「平行世界の可能性があるから知らないだけだヴァルク」

ヴァルク「・・・本当ですか」

ハク「ああ」

ヴァルク「なるほど、だから自分達のこと知らないんですね」

ハク「そうゆうことだ」

はやて達はリイン？との感動的再開を果たしてヴァルクは平行世界かもしれないと聞いて納得する

ヴィータ「はや・・・まさかリインフォースか」

リイン？「久しぶりだな」

はやて「ヴィータ・シグナム次元断層の方はどうやった」

シグナム「はい、木にもたれかかっているボロボロの男を発見して現

在シヤマルに・・・「そんな怪我で動くななんて正気ですか!？」

シグナムが説明している最中にシヤマルが騒いでいる

佐助「はあはあ、ヴァルクとハクはここにいるしなのは達もいるよ
うだな」

ヴァルク・ハク「^{さん}佐助!!」

佐助「よっ猿飛佐助推参つてな、ちょうど良いここにいる全員に説明しなきゃいけないことがある」

ボロボロの状態の佐助が平行世界を均等に保つ核、四つの平行世界の融合の事まで話した

その間キヤロとシヤマルが回復魔法を掛けていた

ハク「なるほどな」

フェイト「あの、融合してなにかこの世界に影響があるんですか？」

佐助「元々この世界にいないはずの魔物などの存在がいたり無いはずの物が存在したりする」

ガトー『なるほど』

ガトー少佐が納得したように言う

六課全員「え!？」

ガトー少佐が言った瞬間ヴァルクとリン?・ハクと佐助以外

が驚く

なのは「えっと、ヴァルク君のデバイス？どこから喋ったの」

ガトー『私は主のリンカーコアと共にある』

エリオ「初めて聞きました」

ヴァルク「でしょうね（苦笑）」

はやて「ほんなら、ヴァルク君・ハク君・佐助君は民間協力者って事でええか？」

ヴァルク・ハク・佐助「「はい（ああ）」」「」

返事をする と突然警報が鳴る

シャーリー『六課に何者かが攻めてきてます！応戦の準備お願いします』

六課メンバー全員「了解！！」

はやて「ヴァルク君達はここで待っててや」

はやてとシャマルを除く六課のメンバー全員が六課の外に向かった

ヴァルク「ハクさん佐助さんどうします？」

佐助「一応向かった方がいいな、敵がなのは達の手には負えない可能

性があるからな」

ハク「なら向かうぞ」

リン？「私も行こう」

ヴァルク達4人向かうことにした

なのはside

六課を襲撃してきたのは全体が緑がかった白胸部と爪先が赤色の人間の形をしたロボット（ジム）の軍団数は1000を超えるというリーダー機だろう赤と青の2機の機械（ヴァイエイトとメリクリウス）スバル達はFWとシグナム・ヴィータ・ザフィーラは軍団の方を相手にしている

なのは「フェイトちゃん私達はあの2機と戦おう」

フェイト「うん」

赤と青の機械のところに向かう

なのはside終了

なのはとフェイトは苦戦をしているアクセルシューターやデИБインバスター放てば赤い方の20其の円盤状からフィールドが出て来て

それに防がれフェイトが斬りかければシールドが魔力？によって高

出力になったサーベルで防がれるそこから青い方がスターライトブレイカー級の砲撃を放つ

これによってなのはとフェイトは攻撃を通す事が出来ずにいる

なのは「フェイトちゃん大丈夫？」

フェイト「大丈夫、なのはこそ大丈夫？」

なのは「うん、フェイトちゃん時間稼ぎお願い」

フェイト「うん」

なのははカードリッチをロードして魔方陣を展開する、なのはの準備が終わるまでフェイトが赤と青の機械をかく乱して攻撃したりする

なのは「フェイトちゃん準備できたよ・・・全力全開スターライトブレイカー！！」

フェイトがなのはの準備が出来たと聞いてすぐに射線上から離れなのはがスターライトブレイカーを放つ

だがヴァイフェイトは片方のビームキャノンを放ち相殺しもう片方のビームキャノンをなのはに目掛けて放つなのはがビームキャノンを喰らった

と思われたが

ハク「熾^ロ天覆う七つの円環^{アイアス}」

ハクがなのはの前に出て光で出来た七枚の花弁が展開されなのはを守る

ハク「流石ヴァイエイトのビームキャノンだなローアイアスを2枚砕くとは」

ハクは武器創造でビームライフルを創造する

「少し時間を遡って」

佐助「外に出て見たのは良いが・・・」

ヴァルク「そうですね、ですが」

ハク「ああ敵が・・・な」

3人は攻めてきた敵に困惑していた

ヴァルク・ハク・佐助「・・・なんでジムなの!?」

敵がジムなのに困惑していた

佐助「確かに元々存在してないいろいろな意味で！」

ヴァルク「佐助さん落ち着いて」

ハク「しかもヴァイエイトとメリクリウスって・・・完全になのは達に勝てせる気ないぞ」

しょうがないガンダムWで最強の矛と盾って言われてたしね

佐助「しかもジムは数で攻めてるしな・・・流石にキツイだろ」

リン?「ならばどこに行くか話し合えばいいだろう」

佐助「だな、俺はヴァイエイト&メリクリウス」

ハク「俺も同じく」

ヴァルク「自分はジム軍団の方で」

佐助とハクはヴァイエイト&メリクリウスを選ぶ

ハク・佐助「ジャンケンポン!!」

ハクがグー・佐助はチョキ・・・勝者ハク

ハク「それじゃ行くわ」

ヴァルク・佐助「おう」

ハクは屋気楼二式をセットアップして向かう

佐助「なら俺達はリアル無双でもするか」

ヴァルク「そうですね」

リン?「私はヴァルクに着いてくぞ」

佐助「それじゃ party の始まりだ！！（政宗風）」

「時間を戻してハク side」

ハク「まずはこれでも！！」

ビームライフルを連射だがそれは電磁フィールドによって防がれる

ハク「なら！」

屋気楼二式のモードセカンドの大剣で斬りかかる、それをメリクリウスがサーベルで防ぎヴァイエイトがビームキャノンの発射と共に避けてハクを襲う

ハク「くっ」

とっさにかわすハク

ハク「試してみるか」

ハクは武器創造で約束された勝利の剣を創造する

ハク「行くぞ」

ハクはヴァイエイトに斬りかかるがそれをメリクリウスがサーベルで止めるだがハクはそれを狙っていた

ハク「約束された勝利の剣^{エクス}の剣^{カリバー}!!」

エクスカリバーから強大な魔力斬撃が放たれヴァイエイトとメリクリウスが飲み込まれる消滅した

ハク「あっちの方は・・・終わってるな」

～時間を遡って～

sideティアナ

私達はロボットに苦戦している

ヴィータ「ぶち抜けえええええ!!」

ヴィータはスフィアを撃って機械をぶち抜く

シグナム「カードリッチロード・・・紫雷一閃!!」

シグナムは紫雷一閃で機械の魔力刃?のサーベルごと斬る

スバル「倒しても倒してもきりがいいよ」

スバルが一機殴って破壊するだが別の場所から射撃が来るそれをプロテクションでガードするそこにティアナが射撃するそれによつてまた一機

破壊される

ティアナ「愚痴ってもしようがないでしょ」

ウィータはスフィアを作り敵に目掛けて打ちシグナムは敵を斬り倒してキャラは補助魔法をエリオに掛けてエリオは突き壊しザフィーラは殴って破壊するがまだまだ敵は大量にいてFWと副隊長陣とザフィーラが疲れてきている

エリオ「敵もなかなか強いですし厳しいですね」

キャラ「うん、だけどがんばろ」

ティアナ「そうね、スバル行くわよ」

スバル「OK」

だが機械から超遠距離射撃がティアナの後ろから来る、それに対処できなくて目を瞑る

キャラ「ティアナさん!!」

来るであろう痛みがこなくて目を開ける

ティアナ「え？」

そこには猿飛佐助さんがいた

佐助「猿飛佐助推参ってな」

ティアナ side 終了

佐助はすぐにクナイを投げてティアナを狙撃した敵を破壊する

ヴァルク「後は自分と佐助さんに任せといてください」

シグナム「なに？」

ヴァルクはガトール少佐をセットアップしてクシャトリアモード

佐助「今でも厳しいんだ後は俺達に任せとけ

そんじゃ行くぜ行くぜ行くぜ！！（モモタロス風）」

終焉の死を与える影を振り回しジムたち大量に破壊していく

ヴァルク「自分も行きます、行けファンネル！！」

ヴァルクはバインダー×4からファンネル全てををいろいろな場所に展開してジムの破壊しさらにビーム砲を近くのジムに放つ

佐助「大量殲滅だ！魔王玉！！」

何個もの強大な魔力の玉が現れそれをジムに向かって投げるそれがジムに当たり大量のジムが消滅し他が連鎖爆発を起こす

佐助「俺の強さわ泣けるでえ（キンタロス風）てか」

佐助がジムを斬ったり魔王玉で消滅させたりヴァルクがファンネルで破壊したりビーム砲で破壊したりで15分で壊滅させた

説明＋戦闘（後書き）

ヴァルク「ジムにヴァイエイト&メリクリウス・・・」

ハク「しかもビームキャノンの威力が強化されてないか？」

ラハール「ヴァイエイトはなのはのスターライトブレイカーを相殺させる威力を一発次のビームキャノンは完全に殺す気で放ったからローアイアスを二枚砕く最強の威力を調整できるから」

佐助「うわゝひでえ」

ヴァルク「今回はハクさんなのはさんに佐助さんはティアナさんに好意を持たれるのは確定ですね」

ラハール「だね、次は訓練と日常に行きまーす」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7215x/>

魔法少女リリカルなのは～融合せし平行世界の未来～

2011年10月30日18時15分発行